

2023 年度 個人研究実績・成果報告書

2024 年 4 月 15 日

所属	基盤教育機構	職名	准教授	氏名	手嶋 進
研究課題	サステナブル・アントレプレナーシップの普及 — 地域再生可能エネルギー事業の事例研究				
研究キーワード	サステナブル・アントレプレナーシップ、サステナブル・イノベーション、サステナブル・ビジネスモデルの普及、地域再生可能エネルギー事業		当年度計画に対する達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた	
関連するSDGs項目	7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに	12. つくる責任 つかう責任	13. 気候変動に具体的な対策を	11. 住み続けられるまちづくりを	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>今年度は（1）サステナブル・ビジネスモデルの普及と（2）サステナブル人材育成の観点から環境プロジェクト参加学生の自己認識の変化を研究した。</p> <p>（1）サステナブル・ビジネスモデルの普及</p> <p>利益追求だけでなく、社会と環境への貢献を使命としたサステナブル・ビジネスモデル（SBM）が普及すれば、社会全体の便益が向上する。今年度の研究目的は、地域コミュニティが主導する、もしくは便益を享受するような小規模分散型の再生可能エネルギー事業（地域再エネ事業）の7事例をサステナブル・アントレプレナーシップの視点から分析し、事業がどのように普及していくのかを明らかにすることであった。これまで我が国において、複数の地域再エネ事業が事業化されてきた。しかし、これらの先行事例の情報が開示されているにもかかわらず、地域再エネ事業が十分に普及しているとは言い難い。そのため、地域再エネ事業の事業化に成功したサステナブル・アントレプレナーが「先行事例の何を参考にし、どのように自分の地域に適した事業を立ち上げたのか」、そのメカニズムをまず明らかにする必要がある。そこで、地域再エネ事業の事例研究を行うことでSBMの普及理論構築を試みることにした。</p> <p>地域再エネ事業の国内事例数は限定的であり、事業の普及理論もまだ確立されていない。そのため、研究方法として、理論構築のために複数事例研究を用いることにした。意思決定の背景やプロセスを理解するため、サステナブル・アントレプレナーの方たちにインタビューを実施して、先行事例のSBMから何をどのように取り入れて事業化したのかを分析した。</p> <p>事例分析に用いる理論枠組みとして、ビジネスモデルとSBM、普及理論の先行研究を調査した。ビジネスモデルとは、どのような価値をどのように創出し、伝達するかを表現したものだが、その定義は研究者によって異なる。本研究では、SBMの普及プロセスを詳細に分析するため、ビジネスモデルを複数コンポーネント（事業を構成する特徴的な要素）から構成される概念として用いることにした。</p> <p>インタビュー調査の結果から、先行事例のSBMはそのまま他のサステナブル・アントレプレナーに採用されるのではなく、SBMを構成するコンポーネント単位で参考にされ、変更され、新たに構築されていることが明らかになった。</p> <p>本研究の貢献として、コンポーネントの概念を用いることで、SBM普及の対象とプロセスをより詳細に分析する枠組みを提供することができた。一方、今後の課題としては、サステナブル・イノベーションの検討がなされていないこと、一つの事例から複数名のステークホルダーにインタビューできていないことが挙げられる。</p> <p>本研究の成果論文を所属学会の学会誌に投稿し、現在査読コメントへの対応中である。</p>					

(2) 環境プロジェクト参加学生の自己認識の変化

大学の社会的責任の一つとして、教育研究機関として学生がその活動を通じて持続可能な社会の構築に貢献できるようなマインドを養い、必要な知識やスキルを修得できる機会を作る責任がある。課題解決型教育やキャリア教育等におけるPBL (project-based learning) は、そのようなサステナビリティ人材を育成する方法の一つである。

千葉商科大学では、自然エネルギー100%大学の取り組みのひとつとして、学生団体 SONE が 2018 年 3 月に設立され、学生や教職員向けに省エネのための意識啓発活動を推進している。2022 年度は教室の断熱化プロジェクトが立ち上がり、断熱化の施工を施工会社に任せるのではなく、「自分事化する」ためのワークショップ形式として企画、実施された。この教室断熱化プロジェクトでは、施設管理としての学校法人への説得と協力の取り付けだけでなく、設計や施工といった外部協力者との連携や調整も学生が担当した。

本研究では、省エネの意識啓発を担う学生団体 SONE の学生を対象として、仕事の遂行に関わる能力とサステナビリティの考え方を身につけたかについて、本人たちがどのように自己評価しているか、インタビュー調査を行った。

調査の結果、仕事の遂行に関わる能力については、活動への関わりを通じてコミュニケーション能力やプロジェクト管理について、学生自身が成長を実感していることが把握された。他方で、活動することにより自分自身の能力が不十分だと認識する機会となり、自己評価を活動前よりも厳しく査定する学生も見られた。サステナビリティの考え方については、本研究で扱った「サステナビリティ・マインドセット」が抽象的であったものの、活動とサステナビリティの考え方や行動様式との間に部分的ではあるが共通点や共感を示す学生が把握された。

2. 著書・論文・学会発表等

【論文 (査読あり)】

杉本卓也・手嶋進「環境プロジェクト活動の企画運営による学生の自己認識への影響」環境科学会誌 (2024 年 37 巻 1 号 p.15-27)

【学会発表等】

手嶋進「サステナブル・ビジネスモデルの普及—地域再生可能エネルギー事業の事例研究」企業と社会フォーラム (JFBS) 第 12 回年次フォーラム 2023 年 9 月 8 日 (慶應義塾大学日吉キャンパス)

3. 主な経費

研究費の約半分は書籍、論文購入に充てた。残りは学会の参加費及び事例調査の交通費等であった。

4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等)

【その他の活動】

- ・千葉県太陽光発電設備等共同購入支援事業に係る支援事業者選考審査委員会の委員 (千葉県)